

特 集

## 東日本大震災に伴う石巻赤十字病院における 病院看護支援活動を行って

神谷 智子<sup>1</sup>

### はじめに

平成 23 年 3 月 11 日 14 時 46 分。日本の観測史上最大の災害が発生した。東北地方三陸沖を震源地とするマグニチュード 9.0 の巨大地震で、東北地方では震度 7 の激しい揺れにみまわれた。さらにその後押し寄せる太平洋沿岸地域の津波による被害や福島原発問題、千葉県湾岸地域の液状化現象、首都圏の帰宅困難者など、東北地方から関東圏に至るまで東日本全域に大きな被害をもたらすこととなる大災害となった。

日本赤十字社では地震発生直後から、さまざまな救護活動が展開されていた。今回の地震は被災地での医療救護活動に加えて、地域で唯一の基幹病院となった石巻赤十字病院の病院支援活動も行われた。全国の赤十字病院から看護師・助産師が集結し、石巻赤十字病院での病棟看護支援にあたった。その第 1 班として 3 月 14 日から 20 日まで、全国 7 か所の赤十字病院から看護師および助産師 18 名が派遣された。今回は 4 月 9 日から 14 日までの 6 日間、第 6 班として派遣された際の活動の実際を報告する。

### 日本赤十字社における救護活動と石巻赤十字病院の状況

日本赤十字社の事業において、救護活動は第一義的な活動として位置づけられ、1888 年の磐梯山の噴火災害を契機として、さまざまな災害場面において多様な救護活動を展開している。今回は、日本赤十字社救護規則による災害救護業務の医療救護の一環として、石巻赤十字病院における病棟看護業務支援を遂行することとなっ

た。

石巻市は宮城県東部に位置し、市の南西部沿岸部から 4.5km ほど内陸に石巻赤十字病院はある。西は三陸自動車道、東は一関街道の主要道路に挟まれた場所に建っている。以前は沿岸部から 2km 弱の位置にあったが、旧敷地内に残っていた看護専門学校は今回の津波で一階建物部分は壊滅的な損壊を受けていた。免震構造で建設された新病院は平成 18 年に現在の場所に移転し、今回の震災では建物被害はほぼなかったといわれている。そのため石巻赤十字病院には、災害拠点病院として災害対策本部が設置されるとともに、地域で唯一の基幹病院となり相当数の傷病者が搬送された。

石巻赤十字病院は病床数 402 床で 6 階建てである。1 階は外来、2 階は手術室と透析センター、3 階以上が病棟で西病棟と東病棟と分かれて 8 病棟がある。本来は 2・3 次救急対応の病院であったが、震災後は被災者や薬の処方希望する患者が多く押し寄せ、高次高機能を発揮する余裕がない状態であった。まるで野戦病院化し、その中でスタッフは昼夜を問わず、不眠不休の救護活動および医療提供を行った。自らが被災しながらも自宅に戻ることでもできず、入院患者や傷病者の手当てにあたり、極限状態で勤務していた。これらのスタッフの状況を緩和するため、日本赤十字社では病院看護業務支援として全国の赤十字病院から看護師や助産師を派遣することとなった。

### 病院看護業務支援活動の要請から派遣決定まで

地震の発生時は大学で勤務していた。突然、今まで体験したことのない大きな揺れがゆっくり長く続き、慌ててワンセグテレビを見た。東北沖で地震が発生したことを知り、刻々と状況が報道されていくにつれ被害の大き

<sup>1</sup> 日本赤十字豊田看護大学

さが明らかになっていったが、他人事のように客観的にテレビを見ていた。

震災が急に身近なものとなったのが石巻赤十字病院の病院支援の応援要請を受けた時であった。大学に応援要請がきていることを知り、4月9日からの第6班を志願した。被災地での支援活動の経験はなく、実際の活動内容や現地の様子もわからない状況であったが、「行けるとしたら自分かな。」と思っていた。申し出てから間もなくして、第6班として派遣されることが決定したとの連絡を受けた。この時から、今回の震災が身近なものであることを実感し、自分に与えられた任務が無事遂行できるのか不安を感じるようになった。日本赤十字社に入職して以来、自分が赤十字の一員であることを強く感じたことを記憶している。

## 派遣決定から出発まで

派遣が決定してからは、準備に追われる毎日であった。被災地では「自己完結型」と教えられて準備を始めたが、初めての体験のため何が必要なのか、どのように準備すれば良いのかわからず戸惑った。先に救護活動を終えた本学の職員に現地の状況などを聞き、物の調達から始めた。食糧、水、衣類、衛生材料、保清製品などを求めて薬局やスーパーに向かった。しかし、飲料水は購入制限があり、非常食品やドライシャンプーなどは売り切れていた。これらの物は既に被災地に優先的に送られているために被災地以外では品薄な状態であった。被災地で必要なものは被災者も支援者も一緒なのだと感じた。支援活動をするためにも、日頃からの備えが重要であることを再認識した瞬間であった。

出発前日は新幹線で東京に向った。今までに持ったことない程の大きく重いリュックサックを背負って電車に乗り、やっとの思いで御徒町のホテルに到着した。するとホテルの方に、「広い部屋を用意したので、ゆっくりして欲しい」と声をかけられた。支援活動をするにあたり、さまざまな人に支えられているのだと感激した。

## 病院支援活動の実際

4月9日（実働0日）

当日は朝8時に本社の会議室に集合し、浦田喜久子看護部長より現地の状況や活動時の注意事項などの丁寧な

説明を受けた。その後バスに荷物を積み込み、桜が舞い散る中、本社を出発した（写真1）。石巻赤十字病院までバスで7時間の長旅の始まりである。那須高原を過ぎたあたりでバスの運転手から、「これから先は地震の影響で道路状態が悪く、揺れる可能性がある。」とのアナウンスがあり、確かに揺れた。道路の状態が多少悪くても、通行できるだけで幸いである。途中、仙台空港付近を通過した際は、高速道路の高架下両側に瓦礫が流れ込んだ跡が見えた。空港付近といっても肉眼では海岸が見えない程かなりの距離があるが、ここまで津波が押し寄せてきたのかと思うと被害の大きさと怖さを目の当たりにした。三陸道を降りてから石巻赤十字病院に到着するまでは時間はかからなかった。病院周辺には瓦礫などなく、原野に病院がそびえ立っている印象を受けた。



写真1 助産師業務支援の安藤仁恵助手と共に本社を出発

病院到着後は救護班と合同で現地のオリエンテーションがあり、石井正医師と高橋副看護部長から救急患者数や入院患者の受け入れ状況、入院患者の主な疾患や療養状況などの説明があった。今回の病院支援第6班は、看護師9名と助産師11名の合計20名であり、他にER第3班12名と学校支援2名の総勢34名が5日間の実働とともにするメンバーであった。院内で生活する拠点は1階のリハビリテーション室が準備されていた。人生初の寝袋生活を覚悟していたが、パラマウント社からの簡易ベッドと熊本赤十字からの毛布の提供があり、想像よりもはるかに良い環境で過ごすことができた（写真2）。



写真2 6日間過ごしたリハビリテーション室 (撮影: 安藤仁恵助手)

4月10日(実働1日目)

病棟看護業務支援の配置は表1の通りである。病棟によって業務内容と勤務時間が異なっていた。5日間クールで支援者が交代して継続的に業務をするために、引き継ぎは支援者同志で行い、病棟ごとに申し送りノートが作られていた。前日に第5班の広島原爆病院の看護師から病棟の構造や物品配置、業務内容や注意事項などの説明を受けた。

看護は得意である。しかし、新しい場所で実践するのは緊張するものである。朝7時半リハビリテーション室から出てすぐのA階段を6階まで昇り、「いざ病棟へ」という気持ちで意気込んで向かった。6階東病棟のスタッフは明るく、自然な形で迎えてくれた。考えてみれば、自分で6人目の支援者であり、受け入れる側にとって人の交代は日常なことになっていたのだ。このことが特別ではないことに意味があると感じた。

支援活動の主な業務内容とスケジュールを図1に示す。清潔ケアや食事介助など日常生活援助が業務の中心

であった。また、血糖測定や吸入などの処置も実施した。患者を受け持つことはなく、カルテ閲覧や記録をすることはなかった。入院患者の情報はベッドに記載された名前と本人から直接聞くお話のみであったが、業務を行うにあたって不都合はなく、根ほり葉ほり聞かなくても、相手の状況は推察できた。

表1 石巻赤十字病院病棟看護業務支援第6班

	派遣施設	経験年数	勤務場所
1	芳賀	15	3階東(循環器・心外)
2	武蔵野	13	4階東(整形・形成)
3	広島原爆	11	4階西(脳外・眼・耳鼻)
4	沖縄	19	4階西(脳外・眼・耳鼻)
5	松山	36	5階東(消化器外科・呼吸器外科)
6	松山	16	5階西(内科・泌尿器科)
7	広島原爆	25	5階西(内科・泌尿器科)
8	豊田看大	11	6東(血液内科・緩和ケア)
9	芳賀	9	6階西(糖尿病・呼吸器)



写真3 病棟看護業務支援第6班メンバー

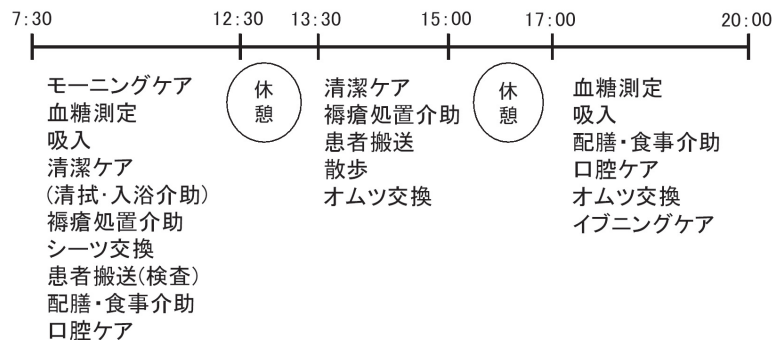


図1 一日の業務内容とスケジュール



初日の業務は環境整備から始まった。入院患者に挨拶をしながらラウンドしていくと、病棟の角にある談話室に布団などが置かれていた。震災後のガソリン不足で通勤が困難になった看護師が宿泊して勤務をしていたとの説明を受けた。今は笑顔で働いている看護師も被災者であり、それぞれが辛く大変な想いをしながらも看護し続けてきた現実を痛感した。

#### 4月11日（実働2日目）

この日は震災後1か月目の日であった。1階に設置していたイエローエリアを健診センターに移転し、一般外来が再開された。外来には診察を待ち望んでいた大勢の患者が来院し、人であふれていた。よく見る病院の外来風景である。病院が震災前の状態に戻る第一歩を踏み出したような印象を受けた。

午後2時46分、院内全体に黙祷の放送が流れた。この時は病棟の看護師とともに臥床患者の清拭をしていた。実際に揺れた時間と同じ3分間の黙祷はかなり長い時間に感じた。終わりの合図で目を開けると、今まで笑顔で一緒にケアしていた看護師が涙を浮かべていた。どのように声をかけて良いのかわからず戸惑っていると、彼女は地震の体験を少しずつ話し始めた。仙台のご実家の被害が大きかったこと、震災後に連絡が取れなくて両親の安否がわからず不安だったこと、実家の状況を見に行きたいが行けないことなど、切々と語ってくれた。病院では普段明るく笑顔で働くスタッフも、さまざまな辛い状況の中、看護を続けているのだと思った。他にも、患者やスタッフから地震の時のようすや避難所のようすを聞くことがあったが、自分にはどうすることもできず、ただ話を聞くばかりであった。心のケアの必要性を強く感じた時であった。

#### 4月12日（実働3日目）

この日からのガスの復旧によって、売店が再開し、病棟では入浴が可能となった。それまで患者の食事はレトルトや缶詰などの被災食であったが、復旧後は調理したものの提供が可能となった。『石巻赤十字病院の100日間』<sup>1)</sup>に記されている管理栄養士の震災直後の苦悩を思うと、このガスの復旧がどんなに待ち望まれたことであったか察することができる。初めの食事はカレーライスであった。使い捨ての食器でなく普通の皿に盛り付けされた食事を配膳する時は、なぜか自分も誇らしい気持ち

になった。味噌汁が付いたお膳を配膳した時は患者から感嘆の声わきあがった。

病棟看護業務で震災の影響を一番感じたのは食事であった。患者の食事はレトルトのご飯と缶詰または被災食のみで、お茶ではなくペットボトルの水が配られた。これらの食事はワゴンに積まれて配膳されており、食器はすべて使い捨ての紙であった。このような食事を提供するにも、管理栄養士の大変な苦労があったと思うが、震災以前から入院している患者から「またこれ？」との言葉を聞いたときは切なくなった。病院外の避難所等で十分な食事もなく、寒波の中温かい物を食べることもままならない状況と比べれば、はるかに恵まれているのだと感じたからだ。今回、石巻赤十字病院とその近隣の被害が少なかったことが震災を現実のものとする認識を希薄にさせたのだと感じた。実際に病棟の窓からは地震や津波の被害は見ることができず、いつもと変わらない風景であったことも理由と言える。支援者が赤十字救護服で業務をすることは、これらの人々に非常事態が起きていることを理解してもらうためにも意味があると感じた。

#### 4月13日（実働4日目）

災害救護活動では、「何をしたら良いか。」という質問は禁句であると教わっていた。今回の活動では常にこのことを心がけて行動した。自分のすることは自分で考え、探しだすことを徹底した。そのためには、状況をよく観察し、察することを心がけた。そうしていると、自ずと日常生活援助を要する患者のもとに足が向くようになり、看護師が清潔援助や処置の準備をするようすがあれば、「一緒に。」と声をかけることができた。

一番よく訪室した患者は、避難所での長期臥床により仙骨部に巨大な褥瘡がある方であった。自力での体動が困難なことによる苦痛やストレスから、時折暴言がみられた。大声で叫んでいたが、よくよく聞くと家族を呼んでいることがわかった。津波によって夫と離ればなれになり、夫の行方を捜していたのだ。看護師から、夫が別の避難所で無事であることを聞くと穏やかな表情を見せていた。しかし、認知機能低下があるためか忘れてしまい、何度も叫んでいる状況であった。叫ぶことがこの患者の意思表示だと捉え、根気よく食事介助や清潔ケアを行いながら患者の叫びを聞き、話の相手をしていた。すると4日目のこの頃には「ちび助、来たか。」と言って

いただけるようになり、あと一日で終わってしまうことを寂しく感じたことを記憶している。今までの看護師経験の中でも、毎日起床から就寝まで1人の患者とこれほど長時間かかわることは少なかったため、今回の業務は看護師として貴重な経験ができたと思う。

#### 4月14日（実働5日目）

活動の最終日。この日の業務は15時で終了であった。交代する伊豆赤十字病院の看護師に引き継ぎを行ったが、申し受ける側は不安げな表情をしていた。おそらく5日前の自分も同じであったと思う。派遣に任命され、被災地を支援しようと意気込んで現地入りしたものの、何をどのようにすべきかわからない心情はよく理解できる。この頃の自分は病院支援とは明らかな成果をだすことが目的ではなく、救護服を着た赤十字の仲間が共に看護することに意味があると感じていたため、気負うことなく看護していくよう言葉を添えた。

すべての業務を終了し、看護部に挨拶をした後、バスに乗り込んだ。病院の玄関では、寒空の中、各病棟の師長やスタッフが見送りをしてくれた。わずか5日間の活動であったが、別れるときは寂しさが込み上げてきた。自分たちはこの場を去っていくが、石巻赤十字病院のスタッフの活動はこれからもここで続いていくのだと思うと、手を振る際の心境は複雑であった。

帰路はバスで8時間かかり、本社に到着したのは日付が変わった深夜2時であった。ホテルに戻り、6日間の活動を終えた。

#### 支援活動を終えて

日本赤十字社の災害救護活動や被災地支援活動の迅速さは周知のことである。加えて、今回のような病院看護業務支援や看護専門学校の学校支援など、現地のニーズ

を即時に感じ取り、実際の支援の形にしていく赤十字の組織力に感動した。今回、現地に到着した時には電気や水道は復旧し、手袋やオムツなどの物資も補充されていた。組織力によって病院内のインフラは整備されていると感じたが、そこで働くスタッフの心のケアは始まったばかりの印象であった。病院看護業務支援活動を通して、外部の看護師が病棟にはいることによって、実質的な業務量の軽減のみでなく、表面化していない看護師の心の支えになれたのではないかと考える。

病院看護支援活動で実施したことは長年経験してきた看護であり、状況は変わっても看護の力は共通であることを実感した。

今回、執筆するに当たり、何をどのように報告すればよいのか悩んだ。考えた末、ありのまま体験したことや感じたことを伝えようと思った。そのことで、赤十字のさまざまな支援のかたちがあることや支援活動をする心情を多くの人に知ってもらうことができ、さらに今後の活動の参考になればと考える。

#### 終わりに

今回の石巻赤十字病院看護業務支援活動では、学内外の多くの方々から支えていただいたことによって無事任務を終えることができた。ご支援いただいた皆様に感謝を申し上げます。今回の支援活動報告が今後の赤十字の災害支援活動の発展の一助となることを期待する。

東日本大震災で被災されたみなさまに心よりお見舞い申し上げますとともに、被災地の一日も早い復興をお祈りいたします。

#### 文献

石巻赤十字病院・由井りょう子：石巻赤十字病院の100日間。小学館，東京，2011

